コルネリオ会

（防衛関係キリスト者の会）

ニュースレターNo. 132

2013 年 4 月

軽井沢新年聖会に参加して

会員　石川　信隆

今年（2013 年）も元旦礼拝のあと、1 月 1 日-3 日まで軽井沢新年聖会に参加することができました。昨年末から、腰の痛みが激しく、参加出来るかどうかと心配しましたが、思い切って行って参りました。今年のテーマ「癒し主イエス」にふさわしく、メッセージの前は聖歌 476 の「やすけさは川のごとく」が何回も何回も歌われ、聖霊が会場に流れるのを感じました。

今年はメッセージの概要資料が配布されず、ただ平野耕一先生がその時その時、聖霊に導かれるままにメッセージを語られました。その中で私が特に印象に残ったみ言葉は、「たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。」（コリント人への手紙第二４章１６節）のみ言葉でした。

ここで、「外なる人」とは、例えば、肉体です。それは現在いかに元気で若々しくても、やがて時の流れと共に必ず衰えていきます。 それは誰もがいずれ経験するでしょう。「外なる人」は衰えるのです。特に今年は腰の痛みで、肉体の衰えを痛感しました。階段を上がるにも、会場へ行くときも痛みをこらえ、足を引きずって行きました。しかし、神を信じる者には、決して滅びない「内なる人」が存在しているのだと教えられました。 その「内なる人」は、ただ単に死んでも滅びる事のない永遠の命を持つというだけではなく、地上の人生においても「日々新たに」リフレッシュされ、成長し、喜びに満たされるのを私達は体験するというのです。

では、「内なる人が日々新たにされる」にはどうしたら良いでしょう。その秘訣は、第一に「主の教えを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。」ことだと教えられました。「主の教え」つまり聖書の「み言葉」を「喜び」とするということが、詩篇１篇によると「幸いな」歩みであり、「何をしても栄える」というのです。

「喜びとする」という言葉は、「み言葉を楽しむ」ことです。「み言葉を楽しんでいれば」、毎日聖書を読みたいと思うようになるそうです。朝読んだみ言葉を頭の片隅におきながら一日を過ごすのです。それが「昼も夜もそのおしえを『黙想する』『思い巡らす』」ということの意味です。そうすれば自然と、み言葉を自分の生活に適用していけるようになるのだと教えられました。

そして第２は、み言葉を信じて素直に行動を起こす。実行することです。

その例として第２列王記５章にあるナーマン将軍のらい病が癒されたお話しをされました。預言者エリシャから「ヨルダン川へ行って７たびあなたの身を洗いなさい。」というみ言葉をいただいたナーマン将軍でしたが、初めはプライドが許さず、そのみ言葉に従う事が出来ませんでした。しかし、最後は自分の高慢さに気付き、自分よりも地位の低いしもべ達の忠告を素直に聞き入れて、神のみ言葉に従いました。そこで病はたちどころに癒されたと云うお話でした。

この新しい一年、み言葉を口ずさみ、み言葉を楽しんで、素直な心で神様に従って歩んで行きたいという思いを強くして帰ってまいりました。

ブラジル・アリアンサ宣教の過去・現在・未来（その３）

会員　圓林　栄喜

４　今後の展望

（１）人を変える場所

アリアンサはサンパウロから 600km も離れた果てしなく広がる緑の大地の中にあります。その１でも書きましたが、多くのキリスト者が送り込まれ、乳と蜜の流れる里の建設を目指しました。それから 89 年が過ぎました。この地は多くの聖徒達によって福音の種が蒔かれ祈られた地でもあります。下桑谷牧師はこの地で何人もの日本人の若者を預かりました。彼らはこの地に来て、悩み、苦しみから解放され、学校や社会に復帰したり、献身したり、宣教師になり再びアリアンサの地に来て伝道に従事している方もいます。下桑谷牧師は、「私は底知れぬ魅力を持つブラジルの大地（この大地は私を包み込んでくれる母なる大地であり、はたらくエネルギーを与えてくれる大地でもある。）そして貧しさを感じさせない人々、私のような者でも喜んで受け入れ働かせてもらえるブラジルに少なからず心惹かれている。」と言います。

（２）「アリアンサ聖書学校」

下桑谷牧師が日本にいた頃、悩める青少年を目の当たりにしつつ助ける力を持たず果しえないままブラジルへ行きました。それから 22 年の間にアメリカシカゴの「クリスチャンアカデミー・スクール」やジョージ・ミュラーの「孤児の家」、「北海道家庭学校」などの研修を積み重ねます。また、順を追うようにみことばが示され、ついに土地が与えられ、プラン作成へとこぎつけます。

「森と土と聖書」を土台とし、集う若者に「健全な戸外運動を与えるとともに食物の供給に役立て、自給生活を教える」ことを目的として、その名を「アリアンサ・クリスチャン・アカデミー『アドラムの家』」と命名します。しかし、３．１１を機に組織表のアドラムの家をアリアンサ・キリスト教会付属の「アリアンサ聖書学校」に改め、希望者をできるだけ早く招けるように準備を進めています。これまでのところ祈りは聞かれ、旧家屋、電気、水道等の修理及び耕作地の整備を終え、野菜等の作付を始めています。また、日本語教育は継続しており、聖書の初級教育も実施しています。

５　最後に

３回にわたり、ブラジル・アリアンサ宣教の過去・現在・未来について説明しました。

「百聞は一見に如かず」です。人を変える魅力のあるここアリアンサに是非多くの日本人が訪問され、神と出会い、神からの新たなエネルギーを与えられることを心から待ち望んでいます。ご関心のある方は、下記までお問い合わせください。

また、先回の NL131 号でお願いしましたアカデミーの土地取得のための経費 100 万円は祈りと献金により満たされました。コルネリオ会関係者からも献金が奉げられました。お祈りと支援に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

IGREJA EVANGELICA ALIANCA
REV.HIROSHI SIMOKUWAYA
C.P.543- PRIMEIRA ALIANCA
16800-973-MIRANDOPOLIS-SP-BRASIL
TEL＆FAX　18-3708-1265

自衛ということ

海軍兵学校 102 分隊会員　西澤　邦輔

矢田部稔兄から、２０１２年１２月２９日に発行された海軍兵学校 102 分隊会報（第 22 号）の「自衛ということ」という記事の情報提供がありましたので主要な部分を抜粋して掲載させていただきます。

（１）戦後、文科系の学問の中では歴史学が最も事実に即しているので最も客観的であるかのように見なされ、それゆえ、唯物的であればあるほど、その史観は科学的に信頼できるかのように期待された。

しかし、歴史学の素材である資料を選択する段階で既に歴史家の価値観がものを言う。資料を解釈し組み立てるに当たっては尚更である。勿論、歴史的認識の深まりによって思想が深められることはあろうが、歴史が思想を生むよりは、思想が歴史を生む。歴史は科学であるよりは思想である。

言い方を変えれば、一つの思想をもって歴史を見れば、その思想を証明する歴史的事実は必ずある。だから、これこれの思想は人間の歴史に照らして正しいという言い方は常に可能である。だから、正しい歴史観が無数にあって、相互に矛盾し合う。その中からどれを選び取るかは、結局その人の世界観の問題に帰する。

（２）明治以降の富国強兵策は西洋先進国のアジア植民政策を排除することが、つまり自衛が、直接喫緊の目的であり、そのための軍備軍隊の創設発展は至極当然のことであったはずである。ところが、正規の国家的軍隊が創設されて以降、その存在自体が無言の防衛になったであろうことは認めるが、自衛のための戦争といえるものがあったであろうか。すでに日清戦争も自衛のためとは言い難いのではないか。その戦後処理の台湾併合がその事を結果的に物語っているように思う。しかも、道を逸れていて結果がうまくいくとろくなことはない。それが、それ以降の軍隊の存在意義を自衛から遠ざける転機となったのではないか。（軍隊が自衛の姿勢を維持するためには国民の価値観が一定レベル以上に保たれなければならない。）

例えば、貧乏所帯へ大金が転がり込んで急に余裕ができると、堅固な道徳性がない限り、忽ち物心の自己制御が効かなくなって果てしのない欲心に振り回され、生活は乱れ、価値観まで変わってしまうようなものである。そう見れば明治８０年の歴史は、余りにもお決まりのコースである。遂に本土決戦まで追い詰められたが、これは自衛のためとはいえない。その意識もなかった。先に手を出した喧嘩の最後の意地を見せるためにすぎなかったのではないか。

（３）日本の歴史には都市国家の経験がない。つまり、市民自己責任国家の市民であった経験がないのである。戦争は殿様がするものであって、百姓町人には、とばっちりはあっても、責任関係はない。明治以降も心理的には大差はなく、なるほど市民も徴兵されて軍隊の構成員とされたが、それは殿様に徴用された庶民の場合と同様、「天皇のために」徴用された臣民であって、そこに要求される犠牲が国民の自衛のためであるという感覚も自覚も事実もなくて、ただ「大君の醜の御盾」としての感傷的大義意識によって、為すことすべてを自己正当化していただけのことである。そのような我々の立場からすれば、実際あの頃、「天皇のため」という犠牲の目的的人格を持たない民主国米国人は、何のために命を捨てて我々と戦うことができるだろうかと、大いに疑問に思われるものである。

戦後の再軍備問題がなかなかすっきりしないのは、自衛という感覚が日本人には生理的に納得できないからではないか。軍隊とは、「天皇の軍隊」、せいぜい国家権力のためのものであって、庶民にはないにこしたことはない程度のもの、このような自衛への無感覚と偏見が、軍事への無視反感になっているのではないか。朝鮮戦争を機に、急きょ「反憲法、超法規的」に軍隊が作られたが、６０年経った今も認知されない私生児の取り扱いである。このことがすでに、あるいは今後、どのような後遺症を国民の運命に残すことか。

（４）海兵７７期機関紙「江田島」最新号（平成２２年６月発行第９１号）に、７５期生徒で元最高裁長官三好達氏が、平成１５年建国記念日講演要旨を「日本再生の道」と題して寄稿している。その中に５項目の「わが国の（憂うべき）現状」が挙げられ、一々読み

ごたえがあるが、その最後「国防意識の欠如」には、こんな言葉がある、

「・・平和主義を憲法に掲げ、戦争をしない意思を表明していれば、一国の平和は保たれるという思想が、我が国を風靡しています。・・国家にはどうしても果たさなければならない究極の任務がある、・・国民と国土を外敵の侵略から護ること、これが究極の任務です。・・わが国の国民は、このような意識が希薄であり、為政者もこのことを強く申し述べないのが現状であります。かくして、・・遂には、我が国民が、我が国土の中から、他国の工作員によって拉致されるという事件まで生じています。・・国民が国民として国を護らないと悲惨な目にあうということを、もっと教えなければならない。・・」

書籍紹介

最近出版された、いくつかの書籍があります。自衛官として、クリスチャンとして感じることがいろいろあると思いますので、お読みいただき、感想などいただければ幸いです。

１　『戦争は人間的な営みである―戦争文化試論―』

（石川明人　著　並木書房）

戦争は悪である。誰もが平和を願う。だが、それにもかかわらず戦争や軍事には人を魅了するものがある。なぜ人間は「戦い」に惹きつけられるのか？なぜ人は「兵器」に興味を抱くのか？「戦争」は純然たる悪意」のみの産物ではない。本当に平和について議論をするのならば、軍事は「文化」であり、「戦争は人間的な営み」であることを素直に認めなければならない（著書紹介文抜粋）

著者：昭和 49 年東京生まれ。北海道大学 助教
博士（文学）宗教学・戦争論
主論文「アメリカ軍のなかの聖職者たち-従軍チャプレン小史-、「戦艦大和からキリスト教へ-吉田満における信仰と平和-」

２　『武士道とキリスト教』

（笹森建美　著　新潮新書）

武士の切腹は宣教師の殉教に通じる。「義」は「愛」に呼応する―武士道とキリスト教の根幹には、驚くべき共通点があった。牧師である著者は、日本屈指の剣術家というもうひとつの顔を持つ。「格好だけ良いのは本物でない」「魂とは私という人格である」・・人の生死を問う二つの「道」をきわめて得た、今日本人に必要な智恵（著書紹介文抜粋）

著者：昭和８年青森生まれ。駒場エデン教会牧師
小野派一刀流、大長刀直元流、居合神無想林崎流宗家を務める。早稲田大学哲学科、米国デューク大学大学院神学部卒業

中村誠一兄のためにお祈りください。

中村誠一兄は２月に脳内出血で倒れ入院中です。３月に沖縄へ引っ越される予定でしたがリハビリが必要です。癒されるようお祈りください。

２０１３年度コルネリオ会総会案内

２０１３年度のコルネリオ会総会を次の予定で実施します。総会会場として今回は馬橋キリスト教会の一室をお借りして開催することになりました。ご都合のつく方は参加ください。

日時：２０１３年５月１１日（土）
１３３０～１６３０
場所：馬橋キリスト教会
東京都杉並区高円寺北 4-24-11
連絡先：圓林（えんりん）03-3312-8043

献金感謝（2012.12.1-2013.3.31）

いつもコルネリオ会を覚えていただき感謝致します。
吉田靖、矢田部稔、長濱貴志、川村功、海野幹郎、今市宗雄・敬子、石川信隆、大久保真道、圓林栄喜・さゆり、加瀬典文・真弓、伊東忠臣
廣田具之、山下和雄

新年度を迎え、新たな出会いが生まれていると思います。出会いを大切にし、良きキリストの香りを放ちたいものです。　（編集子）